

Встреча

邂逅

思いがけず巡りあう

ロシアにおける
マとエダヤ
（文学・音楽におけるその意味）

ヨコタ村上孝之

（大阪大学人文学研究科准教授）

高橋 健一郎

（同教授）

赤尾 光春

（国立民族学博物館特任助教）

佃 菜通子

（ピアニスト）

17:30開場
18:00開演

2024年 9月30日(月)

大阪大学会館講堂(豊中キャンパス)

(※参加自由ただし資料代として500円申し受けます。)

主催: ムーザ芸術研究会

共催: 大阪大学人文学研究科

連絡先: ムーザ芸術研究会事務局 TEL06-6850-5945

ワークショップの趣旨

ロマとユダヤはいろいろな面で共通点を持つ。両者ともディアスポラの民であり、居住国においては差別・抑圧を受け続けた（あまり知られていないが、ロマの多くもホロコーストの犠牲になっている）。

ロシアは周知の通り、19 世紀終わりから 20 世紀初頭にかけて、世界最大のユダヤ人人口をかかえた国で、その社会、経済、文化にユダヤがあたえた影響は大きい。同時に、ロマ（ジプシー）も東欧に広くその人口が分布しており、ロシア（ソ連）にも多数のロマが居住していた。ロマの主な職掌は鍛冶、占い、音楽などであったが、ジプシー音楽がロシアの民族音楽・芸術音楽に与えた影響は大きく、今日、われわれが「ロシア」の歌と考えるものの多くがジプシーの歌だったりする。ロシアの作曲家たちも「スラブ」という名のもとにジプシー音楽を作品に取り入れた。また、プーシキンをはじめ、多くの文学者がロマ文化に魅了されていた。ユダヤの音楽はそのような形で明確な影響をロシア音楽、ロシア文化に与えていないが、クレズマーもロマ音楽と同じく、ロシア・東欧では祝祭の補佐を務めており、同様の機能を果たしていたといえる。また、ユダヤ音楽はディアスポラの定住先の音楽を柔軟に取り入れていっており、ロシア・東欧ではロマの音楽も自らのイディオムに大幅に加えている。その意味でジプシー音楽とユダヤ音楽の間には連続性がある。

本ワークショップでは、このような観点から、ロマとユダヤがロシア人の想像力にいかなる影響を与えていたのか、ロシア文化（文学・音楽）にいかなる影響を与えていたのかを探っていく。主に取り上げる対象はプーシキン、トルストイ、チャイコフスキー、アレンスキー、ラフマニノフなどである。

スピーカーおよび演者の略歴

ヨコタ村上孝之 大阪大学大学院人文学研究科准教授。東京大学大学院比較文学比較文化専攻単位取得退学（文学修士）。プリンストン大学比較文学科修了（PhD）。専門はロシア文学、比較文学。著書に *Don Juan East/West*、『二葉亭四迷』、*Mother-tongue in Modern Japanese Literature and Criticism* など。近年は 精力的に音楽活動を行っており、DTM を使って楽曲を配信、ライブハウスで演奏し、またクラシック系の曲 を書き、それがプロの演奏家によって演奏されている。

高橋健一郎 大阪大学大学院人文学研究科教授。東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程修了。博士（学術）。文部省アジア諸国等派遣留学生として、ロシア人文大学に留学。専門はロシアの言語と音楽。著書に『アレンスキー 忘れられた天才作曲家』、『ロシア・アヴァンギャルドの宇宙論的音楽論』など。ピアノのソロや伴奏、室内楽などの演奏活動も行っている。

糸尾光春 総合研究大学院大学博士後期課程修了（学術博士）。国立民族学博物館特任助教。専門はユダヤ文化研究、ウクライナ・ロシア地域研究。共編著に、『ユダヤ人と自治——中東欧・ロシアにおけるディアスポラ共同体の興亡』（岩波書店）、『シオニズムの解剖——現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克』、共訳に、S・アン＝スキ／ゴンブローヴィチ『ディブツク／ブルグント公女イヴォナ』（未知谷）、『トレ布林カの地獄——ワシーリー・グロスマン前期作品集』（みすず書房）、デル・ニステル／ベルゲルソン『二匹のけだもの／なけなしの財産 他五篇』（幻戯書房）など。

佃菜通子（ピアノ）チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院ピアノ科卒業。V・カステルスキー、S・イゴリンスキー、D. カプリン（室内楽）の各氏に師事。グネーシン記念モスクワ中等特別音楽学校で E. イワノーワ氏のもとで学ぶ。イタリア、ブルガリア、ルーザ国際ピアノコンクール入賞。帰国後、スクリャービン全曲録音プロジェクトに参加。国内のピアノイベント、コンクールなどでロシア語通訳を務める。ピティナ演奏会員。佃なつこピアノ＆音楽教室主宰。